

# 本薬師寺跡、藤原京右京八条三坊 発掘調査の成果

令和元年 9 月 25 日 橿原市教育委員会 文化財課

調査地 橿原市城殿町地内（別紙位置図参照。調査地は特別史跡の指定範囲外）  
調査期間 平成 31（2019）年 2 月 25 日 ～ 同年 3 月 30 日  
調査面積 118 m<sup>2</sup>  
調査原因 史跡周辺環境改善に向けた農道改良検討に先立つ確認調査  
調査機関 橿原市教育委員会事務局文化財課

現在、本薬師寺跡には金堂・西塔・東塔の基壇（及びこれらに伴う礎石等）が地上に残されています。その南側を通る東西方向の農道の南側、二ヶ所（調査区 1 区・2 区）において発掘調査を実施しました。

## ■ 調査区 1 区

1 区は本薬師寺伽藍の中軸線上、中門（1993 年の発掘調査で確認済。）から約 20m 南の地点に位置します。1 区の調査では南門の存在が初めて確認されました。南門関連の遺構として基壇外周の石敷、南門基壇盛土、南門礎石の据付痕・抜取痕があります。

1 区の東半では東西幅 3.3m の石敷を検出しています。20～40 cm 大の石を密に敷き詰めており、南門基壇の周囲を巡る石敷であると考えられます。石材が激しく劣化している部分や後世に抜き取られた部分もありますが、約 7 割の範囲で石材及びその痕跡が遺存しています。石敷の中央部には、幅約 0.6m・深さ最大約 0.1m を測る南北方向の雨落溝も構築されています。

1 区の西端部でも石敷の痕跡を検出しています。この地点は東側の石敷から本薬師寺中軸線で折り返したちょうど対称の位置にあたります。東・西石敷の間が南門基壇であり、その規模は東西 19.8m です。基壇は石敷面より上が削平されていますが、石敷面以下に若干ながら基壇を構築する盛土が残されていました。また、東・西石敷の基壇側辺沿いでは地覆石を据え付けた、あるいは抜き取った痕跡も確認できます。

基壇部分において南門の礎石据付痕・抜取痕であると考えられる土坑 3 基（1003・1005・1006SK）の存在を確認しています。基壇が大幅に削平されているため遺存状況は良くありませんが、位置関係から西側にもう 1 基の礎石があったと推測されます。周辺の発掘調査で発見されている遺構や平城薬師寺との関係性などから、今回発見された遺構が南門の北辺の礎石（柱）列であると考えられます。南門全体の構造については今後の周辺調査が必要となりますが、現時点で南門の構造・規模は桁行 3 間・東西長約 15mとなります。桁行寸法は 17 尺等間である可能性が高いと言えます。非常に大型の門です。

基壇盛土の下では下層遺構を検出しています。下層遺構としては南北溝 2 条があります。これは本薬師寺造営開始より前に構築された藤原京西三坊坊間路の東・西側溝です。過去の本薬師寺跡の発掘調査でも発見されている遺構で、藤原京および本薬師寺の造営過程に関わる重要な遺構として知られています。これが寺域の南側、南門付近においても発見されたこととなります。ま

た、南門付近においては西三坊坊間路を構築するにあたって、その周辺に盛土を施して整地を行っています。

1区の調査では土器や多くの瓦が出土しています。基壇盛土内からも瓦が一定量出土しており、伽藍の構築過程についての今後の手掛かりになると考えられます。

#### ■ 調査区2区

2区は1区から東に約100mの地点に位置します。藤原京右京八条三坊の南東隅付近にあたる地点です。弥生時代～古墳時代初頭の遺跡である瀬田遺跡にも近接しています。

遺構は古墳時代後期及び飛鳥時代前半の溝があります。これらの遺構からは当該期の遺物よりも多くの庄内期（古墳時代初頭）の土器片などが出土しています。南に位置する瀬田遺跡一帯と同様に庄内期前後の遺跡を削平するような大規模な土地改変が古墳時代後期から飛鳥時代にかけて行われたようです。寺院に関しては瓦がごく少量出土したのみで、本薬師寺東南隅の土地利用状況の解明が待たれます。

#### ■ 南門を中心とした調査成果の評価

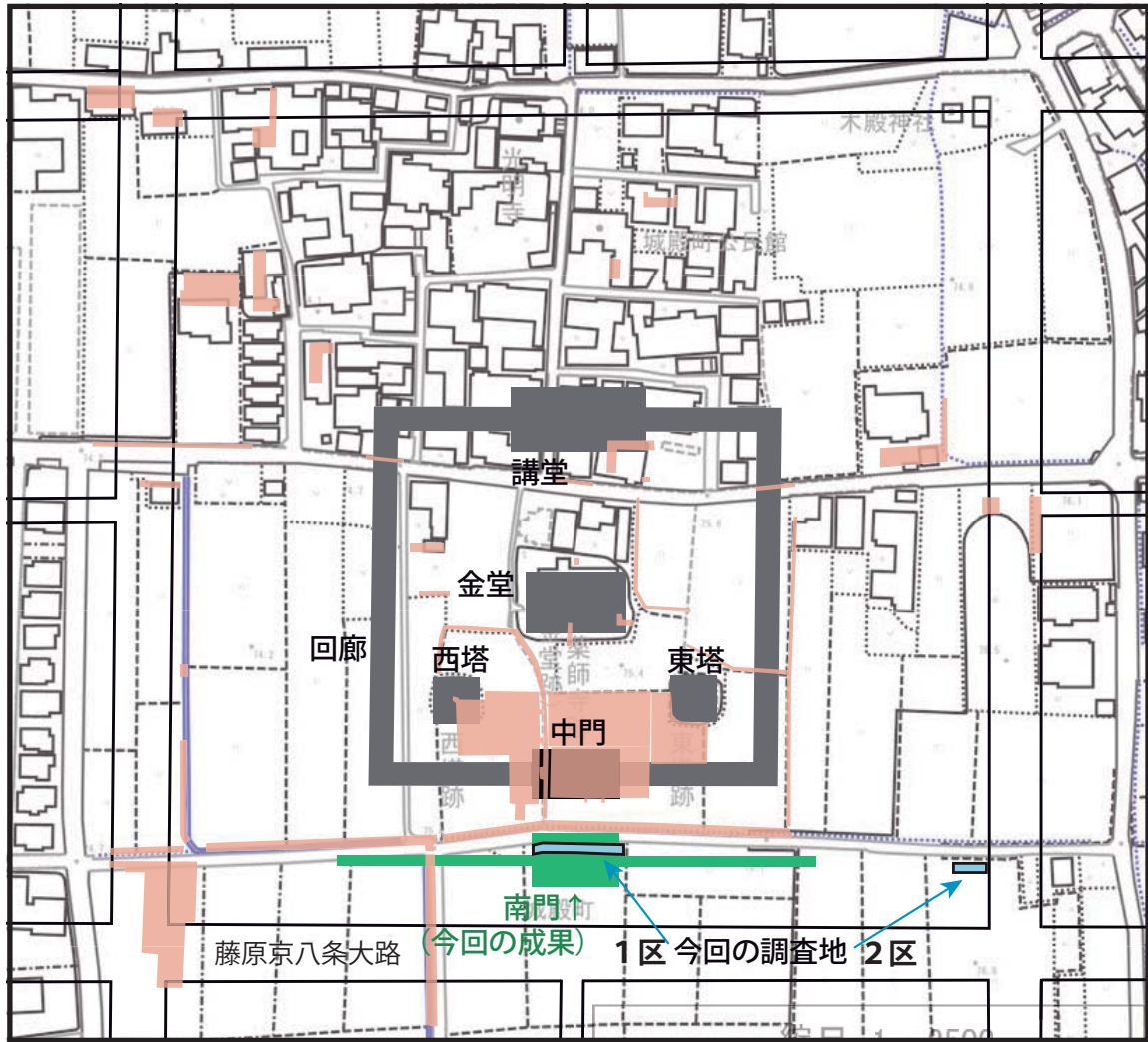
今回の調査では本薬師寺において南門が残っていることが初めて判明しました。本薬師寺ではこの南門が正門であると考えられ、南に位置する藤原京八条大路から南門を通過して寺院へと入る形が正式な経路となります。藤原京以前の寺院では正門（多くは南門）の状況が分かる例が非常に少なく、日本の寺院史上においても貴重な発見と言えます。

南門の全容解明には今後の調査が必要となりますが、現時点でも桁行3間・東西長約15m（17尺等間か）という大型の構造であることが判明しています。本薬師寺では過去に中門も発見されており（奈良文化財研究所による発掘調査）、その構造は桁行3間・梁行2間、桁行13.86m（中央間17尺・両脇間15尺）・梁行総長6.5m（11尺等間）です。今回発見された南門は中門よりもさらに大型です。奈良時代以降、寺院の正門がより重視されて大型化する傾向にあり、本薬師寺はその先駆的存在とも考えられます。

桁行17尺等間を採用する大型門の例として、藤原宮の南面中門や西面南門（5×2間）、大極殿院南門（7×2間）などが挙げられます。いずれも藤原宮を構成する主要な門です。当時の国家主導で造られる特別な施設で採用される規格です。本薬師寺は藤原京の一等地に築かれた国家寺院であり、まさにそれに相応しい立派な正門が設けられたことが分かったと言えます。

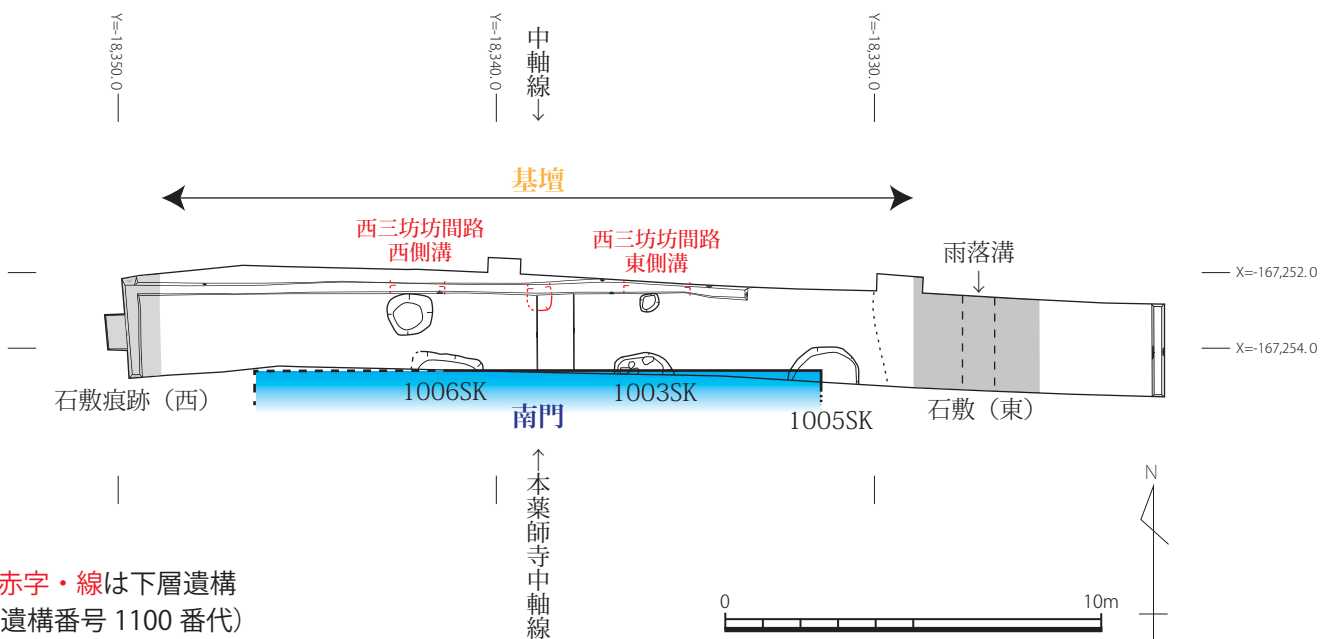
なお、平城薬師寺に築かれた当初の南門（南大門）は桁行5間・梁行2間であり、本薬師寺で発見された南門とは構造が異なります。その為、平城薬師寺に築かれた南門は本薬師寺からの移築ではなく、新築されたものと考えられます。平城薬師寺への移転の実態については古くから議論が重ねられており、新たな研究材料となりそうです。

今回の調査によって本薬師寺の主要伽藍の南限周辺について的一端を明らかにすることができました。本薬師寺の構造や造営過程、その歴史的な位置付けを研究する上での非常に貴重な成果です。加えて、平城薬師寺との関係性や古代都城の国家寺院史に関する議論などにもつながり、今後の調査・研究が期待されます。



- 過去の発掘調査地
- これまでに明らかになっている伽藍配置
- 今回明らかになった南門（塀の範囲は不明）

調査区の位置と伽藍配置



赤字・線は下層遺構  
(遺構番号 1100 番代)

調査区1区 遺構平面図 (S=1/200)



1区全景 完掘状況（西から）



1区全景 完掘状況（東から）



南門礎石据付穴 1003SK（北から）



南門基壇東側から金堂・西塔方面を望む（南南東から）



南門基壇外周の石敷（東）（南から）



南門基壇外周の石敷（東）（南西から）